

平成 27(2015)年度

NGO 海外スタディ・プログラム最終報告書

提出日	2016 年 1 月 27 日
氏名	南 詠子
所属団体(正式名称)	特定非営利活動法人パレスチナ子どものキャンペーン
受入機関名(所在国)	SSCL(The Safety & Security Committee for Lebanon)(レバノン)
研修期間	2015 年 11 月 12 日～11 月 15 日
研修テーマ	レバノンにおける安全危機管理のための実践型安全強化研修

1. はじめに

中東における NGO 活動に関して、昨今益々重要になってきているのが、事業および職員全体に対する安全危機管理である。有事において、団体および個人の身体的・心理的安全を確保しながら、事業を継続することができるようにするためには、いかなる手法が有益といえるのであろうか。

NGO 職員に対して、いかに効果的な安全危機管理研修を行うかということは、NGO 界において主要課題となっているにも関わらず、実際には、各種の安全危機管理研修を評価するための基準が存在しない¹⁾ため、The European Interagency Security Forum (EISF) および InterAction によって 2014 年にまとめられたのが、『NGO Safety and Security Training Project -How to Create Effective Security Training for NGOs-』(以下、『NGO Safety and Security Training Project』とする。別添資料1)である。同研究を参考にしつつ、本論を展開することとする。

同研究によると、安全危機管理の手法は、下記のような種類に分類される。²⁾

- ① 机上理論型(ファシリテーター主導。ケーススタディ、議論、訓練、議論等)
- ② シミュレーション型(ファシリテーター主導。ケーススタディ、机上実技、議論、実践シミュレーション、ロールプレイ等)
- ③ 技能実習型(オリエンテーション、観察、実技、派遣、コーチング等)
- ④ 自己学習型(読書を通じた学習、E-learning 等)
- ⑤ 集団学習型(団体内指導や仲間うちでの交流学习)

上記のうち、特にシミュレーション型における実践シミュレーションは、「NGO 職員が非常事態に際して、よりコントロール感をもって事態に対応できるように準備するための手法として、実践シミュレーションは、文字表記や言葉での注意に比べてより効果的である。³⁾」という。

過去に私は、①、②、④の手法を通じて参加したが、それぞれに一長一短で、それだけで確実な成果が得られたとは考えにくかった。上記①、②、④型に関するメリット・デメリットとしては、下記が挙げられる。

手法	メリット	デメリット
①机上理論型	・ 理論を集中して学ぶことができる。 ・ 議論を通じて、安全計画の詳細について主体的に考え、学ぶことができる。 ・ 研修地までの交通時間が短く、比較的短時間で学ぶことができる。 ・ グループでの議論や意思決定を通じて、共に学ぶことができる。 ・ 参加者同志のネットワークにつながる場合が多い。	・ 職場や普段の環境とあまり変わらない環境下で研修を受けるため、研修に完全に集中することが難しい。 ・ 理論を学んでも、体得する段階まで至らないことがあり、有事の際には活用できないことがある。 ・ 机上でロールプレイを行っても臨場感に乏しく、実践面を含んではいるものの、実際に使える段階には至らない。
②シミュレーション型	・ 日常環境(職場)等から切り離され、集中して学ぶことができる。 ・ ロールプレイを含む場合、非常事態に類似した状況を設定することが可能であり、頭で理解するだけでなく、体得する段階にまで至ることが多い。その場合、非常事態等に即実践することが可能になる場合が多い。 ・ 非常事態に類似した環境下におかれて、不安や恐怖をコントロールすることで、同様の状況に直面した際に、より冷静な行動を取	・ 研修が机上型に比べて費用が高く、参加が経済的に難しい場合が多い。 ・ 研修場所が郊外である場合が多く、移動・宿泊等に時間を割く必要があり、多忙な NGO 職員の負担になりかねない。 ・ 十分に理論を理解していない場合、実践に参加しただけでは十分な体得に達しない可能性がある。 ・ 過去に PTSD を抱えた経緯のある場合、ロールプレイが不適切であると、PTSD を再発

¹⁾ The European Interagency Security Forum (EISF) and InterAction, “NGO Safety and Security Training Project -How to Create Effective Security Training for NGOs-”, 2014, Preface

²⁾ The European Interagency Security Forum (EISF) and InterAction, “NGO Safety and Security Training Project -How to Create Effective Security Training for NGOs-”, 2014, pp.132-136

³⁾ Yin Wei Chong, “A Study on Factors Predicting Post Traumatic Stress Disorder amongst Humanitarian Workers, 2012

	ることができる。	する場合がある。 ・ 参加者によっては、恐怖でフリーズしてしまい、十分な学習を行えない場合がある。
④自己学習型	・研修参加に比べて安価な場合が多く、自分の都合のよい時間に学習できる。 ・自己にとって最適な文献や資料を見つけることができた場合、十分な学習を行えば成果は高い。	・ E-learning の場合、インターネット環境が整備されていない状況下では十分な学習成果を上げることができない。 ・ E-learning におけるシミュレーションは、対面での実地訓練に比べて現実感に乏しい。 ・ 動機が乏しかったり、多忙であったりする場合、学習が途切れてしまう可能性が大きい。

安全危機管理研修の新しい傾向としては、上記に挙げた方法を組み合わせたハイブリッド学習というものが挙げられる。これは、従来の研修手法と E-learning を適切に組み合わせて学ぶ手法であり、その効果は非常に高いといわれている。一方で、同方法は他の方法に比べて経費がかかる、個人の動機次第である、参加者が学習に労力と時間を費やす必要がある等の懸念事項が挙げられる。⁴

当会が活動するレバノンでは、近年、爆弾テロ事件(未遂含む)が幾度も発生しており、特に昨今では、ISIL による自爆テロが脅威の対象となっている。レバノンはまた人質・誘拐事件の発生率が、世界で第 10 位である。当会が加盟するレバノンの安全情報プラットフォーム「SSCL (The Safety & Security Committee for Lebanon)」の調査データによると、2015 年上半期に発生した約 2000 件の事件等(国軍による取り締まり等も含む)のうち、犯罪・武装対立・事件・暴動等が 67%を占めるという。

複雑な政治・組織構造と近隣諸国との関係性ゆえに、多々の事件が発生するレバノンにて NGO 職員として活動する中で、私自身、もっと効果的に身体的・心理的安全を確保するための手段を学ぶ必要性を強く認識するようになった。

そこで、前述の SSCL に所属する安全情報・危機管理分野で多くの経験を有する専門スタッフから特に薦められたのが、DRC (Danish Refugee Council) が主催する安全危機管理のための実践型安全強化研修「The Hazardous Environment Awareness Training (HEAT)」(以下、HEAT 研修とする。)であった。HEAT 研修は、レバノンのベカー県シュトゥーラにて 4 日間実施され、最初の 2 日間は机上理論、残りの 2 日間は野外でのシミュレーションとロールプレイが実施されることになっている。主催団体 DRC は、1956 年に設立された国際 NGO で紛争地を中心に 35 か国で活動を行っており、同研修には、UNHCR、USAID、UNDSS 等の国連機関職員、Oxfam、Save the Children、International Medical Corps 等の大手国際 NGO 職員が大勢過去に参加してきた。レバノンにおける HEAT 研修は、2011 年より実施されており、例年、研修の予約が満員になる等、評価を受けてきた研修で、今回がレバノンにおける第 12 回目の実施となる。

同研修では、事前に UNDSS のオンライン学習を行った上で参加することとなっており、また研修の参加後には、アンケート調査の記入やフィードバック等をオンラインで行う。すなわち、同研修は、①机上理論型、②シミュレーション型(ロールプレイを含む)、④自己学習型(E-learning)を含むハイブリッド学習による研修といえる。

『NGO Safety and Security Training Project』では、研修を通じて得られる効果の最大化という項目において、安全危機管理トレーナーが「いかなる状況においても、シミュレーションやロールプレイを用いることは、明らかに実用的かつ効果的である」⁵と発言している。

⁴ The European Interagency Security Forum (EISF) and InterAction, “NGO Safety and Security Training Project How to Create Effective Security Training for NGOs”, 2014, pp.138

⁵ The European Interagency Security Forum (EISF) and InterAction, “NGO Safety and Security Training Project How to Create Effective Security Training for NGOs”, 2014, pp.13

「いかなる状況においても」とされているが、過去に私が参加した②シミュレーション型のロールプレイでは、研修場所となったホテルの一室で突如爆撃が起こったと仮定し、床に伏せるという訓練を行ったが、スピーカーから聞こえる爆発音が隣室への配慮から小さい音であったため、臨場感に乏しく、瞬時に床に身を伏せるための手法を十分に体得できたという感じがしなかった。同研修によると、地面に伏せる場合には、できるだけ平らになって床にうつ伏せ、首の頸椎の部分を手で保護し、足を交差して、口をできるだけ大きく開くことが最も効果的とのことだった(右写真参照)。足を交差するのは、大腿部には重要な体内の血管が通っており、ここを負傷すると、数分以内に死亡することもあることから、足の交差によりできるだけ大腿部を守るためであるという。さらに、口をできるだけ大きく開くのは、耳や内臓へのダメージを極力さけるためである。



その後、別の研修に参加した際に、同じような想定で、爆発音が鳴り響くというシミュレーションがあり、大きな爆発音が鳴ったため、慌てて床に身を伏せた。しかし、後で振り返ってみると、足を交差することと、口をできるだけ大きく開くことを失念していたことに気付いた。個人差はあるにせよ、シミュレーションやロールプレイを用いることは、「いかなる状況においても」有効であるとは限らない。しかし、十分な仕掛け(状況設定)を行い、優れたトレーナーが、十分に考慮されたプログラム内容を用いて、シミュレーションやロールプレイを用いることは、非常に効果的なものになるのではないだろうか。

したがって、私が立てた仮説は、以下の通りである。

「各種条件(①十分な状況設定、②十分に考慮されたプログラム、③優れたトレーナー)を満たした場合には、シミュレーションやロールプレイを用いたハイブリッド学習型の研修は、他の研修に比べて参加者に格段の効果をもたらすことが可能となる。」

その検証の方法として、①机上理論型、②シミュレーション型(ロールプレイを含む)、④自己学習型(E-learning)を含むハイブリッド学習型の中でも、特に実践シミュレーションとロールプレイに十分な力点を置いているといわれる HEAT 研修に参加し、研修後の参加者アンケート結果を通じてその効果を検証することとする。

<注意事項>

同研修内容は、研修内容を事前に知った状態で参加した場合、特にシミュレーション型の研修効果が著しく軽減する可能性が高いことから、主催団体では研修内容に関して一切の守秘義務を貫いている。したがって、同様の研修に参加予定・希望者の場合は、2 章以降で研修の詳細に触れているため、以降の内容を読まれないことをお勧めしたい。

2. シミュレーションやロールプレイを戦略的に用いたハイブリッド学習型の研修における効能

2-1 HEAT 研修の概要

HEAT 研修は、2015 年11月に4日間にわたって実施されたが、その概要は下記の通りである。

名称	安全危機管理のための実践型安全強化研修「The Hazardous Environment Awareness Training (HEAT)」
日程	2015 年 11 月 12 日-15 日
主催	DRC (Danish Refugee Council)
提携	SSCL (The Safety & Security Committee for Lebanon)
場所	室内研修: Masabki ホテル(ベカー県シュトーラ)大会議室(11 月 12、13 日)(地図上の緑色) 野外研修: シュトーラ近郊ラヤック空軍基地横の私有地(14、15 日)(地図上の赤色)

	
講師	DRC 研修専門員 7 名、専門トレーナー(レバノン赤十字 2 名、消防訓練士 1 名、車両修理資格士 2 名)、ロールプレイ役(連携 NGO 等の地元職員) 10 名
参加者	23 名(DRC 本部及び事業地職員、Save The Children 職員、British Red Cross 職員、Norwegian Refugee Council 職員、当会職員等。(勤務地: シリア、リビア、マケドニア旧ユーゴスラビア共和国、スウェーデン、イラク、レバノン等)

続いて、仮説における各種条件(①十分な状況設定、②優れたトレーナー、③十分に考慮されたプログラムについて、順に評価していく。

2-2 十分な仕掛け(状況設定)

研修前には、UNDSS のウェブサイトを通じたオンライン学習により、安全危機管理に関する事前学習を行うことが指示された。さらに、研修の一週間前には、事前の状況説明として、「我々参加者は、仮想の NGO 団体「The Nordic Relief Foundation (以下、NRF とする)」の職員であり、政変に巻き込まれ非常事態にある Midlandia という仮想国にビザを取得して入国し、物資配布等を行うためのアセスメントを行うミッションを持つ」という指示が下された。Midlandia という国は、仮想ではあるものの、国の通貨、歴史、民族、面積などの一般情報から、Midlandia の市民が使用する日常会話にいたるまでが示されていた。さらに、Midlandia における3か月前から直前までの事件が時系列で示されたレポートも送付された。

研修初日は、レバノンの首都ベイルートから大型バスに参加者全員で乗り込み、ベカー県シュトーラにある Masabki ホテルにバスが到着した瞬間、軍服を来た男性が大声で叫び、全員整列するようにと命令した。そのまま、全員で大きなホールへと行進すると、スライドに Midlandia の危機状況を速報するニュースがテロップ入りで報道された。その後、会場の扉が開き、Midlandia で暗躍する政治家、仮想 NGO の職員、軍人らが次々と登場し、自らの主張や Midlandia の状況を矢継ぎ早に発表した。

これらの導入部分は、参加者を圧倒し、かつロールプレイを演じるためのメンバーの一員としての自分を想定するのに十分であった。その理由としては、①事前の情報送付、②参加者を驚かせる仕掛け、③現実味を帯びた情報提供(報道されたニュースは、一般の国際報道ニュースに類似しており、ホール内には Midlandia の国旗が掲揚されていたこと等)が挙げられる。また、仕掛けに至るまでの過程で、非常に重要であったのは、首都ベイルートから約一時間、バスに乗って移動するという行為を通じて、参加者は日頃取り巻く環境から意識的に切り離され、周到に用意された仕掛けを抵抗なく、受け入れることができる状態になっていたということである。これが、首都で実施されたのであれば便利ではあったかもしれないが、仮想国という設定を十分に受け入れることは、非常に難しかったのではないかとと思われる。

2-3 十分に考慮されたプログラム

その後、研修のトレーナーが勢揃いして挨拶が行われたが、それらのトレーナーは先ほど登場した政治家や軍人と同一人物であった。トレーナーらは、「これから学ぶ机上研修は、NRF の職員(参加者ら)として、Midlandia に入国してアセスメントを行うというミッションを達成するためのものである。」と言い渡され、参加者全員が緊張感と使命感を感じた様子が察せられた。トレーナーによって前半の2日間に網羅された内容は、下記の通りであった。

	内容
初日	・各参加者の危機的状況の経験値に関するシェア(参加者のうち5名は、DRC のシリア・ダマスカス事務所で勤務しており、連日モルタル爆弾等が事務所付近で落ちる環境下にある等) ・無線ラジオの使用方法、伝達方法、種類等 ・コンボイについての説明 ・臨床心理士によるストレスへの対処方法 ・IED(簡易爆発物)における対処方法、留意事項 ・実践シミュレーション:IED の爆発現場に関する映像を使ったディスカッション ・安全危機管理計画の詳細とその手法 ・リスクアセスメントの設定方法 ・安全原則と Duty of Care ・危機管理計画(危機状態を想定した管理計画)や標準作業手順書(安全危機管理のための組織における行動手順書)の作成方法 ・実践シミュレーション:突如の爆撃への対応(身の伏せ方、対処、心理状態の説明) ・脅威の種類 ・地雷の見分け方、留意事項
2 日目	・安全危機管理計画の詳細とその手法続き ・立体的なジオラマを使った安全状況の把握方法 ・コンボイ乗車時の無線ラジオの実践稽古 ・実践シミュレーション:IED 爆発時を想定した車内での対応 ・人質・誘拐における対処方法、留意事項 ・男女の性別ごとにおける危機管理 ・GPS の使用方法 ・危機管理に有益なアイテムの説明と紹介 ・実習:怪我人の運搬方法(運搬用の布や毛布を使った実習) ・実習:レバノン赤十字による応急処置方法の講座(4時間)(気道の確保方法、呼吸停止の際の対処方法、包帯の巻き方等)。 ・実践シミュレーション:仮想国に入国準備として、危機管理計画や標準作業手順書を作成 ・実践シミュレーション:仮想国に入国する際のコンボイのグループわけ(5グループ、各5人、運転手、チームリーダー、ラジオ担当、応急処置担当、GPS 担当)と会議の開催 ・ロールプレイ:仮想国を支配している政治家に対して入国許可証を得るための交渉実施

上記プログラムでは、実習と実践シミュレーション、座学がバランスよく組み合わせられていた。また、様々な分野の講義が次々と展開されることによって、参加者が驚きをもって、集中して学ぶことができるように考慮されていた。

研修は、朝 7 時 45 分から夜 10-11 時にわたるまで実施され、昼食と夕食(40 分間)、休憩(10 分間)を挟む以外は、全く自由時間はなく、時間厳守が求められた。非常に多くの内容であったにもかかわらず、十分に内容を把握することができたのは、プログラムの順番と構成が、よく考慮されたものであったことが一つ挙げられる。実際、トレーナーに聞いたところ、過去に HEAT 研修を実施するようになって以降、かなりの改善と工夫を重ねて現在のプログラム内容に至ったとのことであった。

2-4 優秀なトレーナー

机上研修を実施したトレーナーは、DRC の HEAT 研修専門トレーナー7 名と、レバノン赤十字のトレーナー2 名であった。HEAT 研修専門トレーナーは、軍の安全情報担当、消防士、NGO 職員として紛争地で勤務してきた経験等、多彩な背景を持っており、非常に高いプロ意識と経験を積んできた者たちが揃っていた。彼らは、時に厳しく、時にユーモアを交えて講義を行った。また参加者とトレーナー自身の集中力を高く保つため、2 時間以内で次々とトレーナーが交代し、新たなテーマによる講義を行われた。

『NGO Safety and Security Training Project 』⁶には、よいトレーナーのチェックリスト⁶が掲載されており、人道開発援助における知識と経験、安全危機管理における知識と経験、教授資格の 3 項目において、リストが挙げられている。このリストに基づいて、HEAT 研修トレーナーのチェックを行ったが、全ての項目を満たしていた。

2-5 最大の効果を発揮するためのシミュレーション型研修

以上、優れた効果を発揮するための研修の 3 つの諸条件について述べたが、次に HEAT 研修において、シミュレーションとロールプレイがどのように戦略的に取り入れられていたかについて述べたい。

HEAT 研修の後半 2 日間は、シュトラー近郊ラヤック空軍基地横の私有地(仮想国 Midlandia)で終日実施された。参加者は、仮想 NGO である NRF の職員として、5 台のコンボイチームを組み、無線ラジオで基地と連絡を取りながら、仮想国 Midlandia へ入国、各チームごとに Midlandia 内を回り、下記のシミュレーションに遭遇した。

- Midlandia の農家と土地のアセスメントの交渉を行っている際に、突如、地雷が爆破、農家が大けがをする。
- 自動車突如パンクし、タイヤ交換を行っている時、地元民に襲撃され、強盗にあう。
- IED(簡易爆発物)が爆破して車内にいた地元民 3 名が大けがをしている場所に遭遇する。
- 検問所を通った際に、決起した地元の武装団に狙われ、ドライバーが人質になる。
- 物資が困窮している地元民から情報収集と交渉を行う。
- Midlandia の政治家にビザのチェックを求められ、建物内で襲撃され、全員人質、監禁される。
- 車上中に、銃撃戦に遭遇し、廃屋へと全員避難する。その後、一台の車に怪我人等、10 人以上で飛び乗り、危険地を脱出する。
- 昼食中に、突如、木の下にあった IED が爆発、全員で緊急避難する。

上記のシミュレーション中、参加者の中で「これはシミュレーションだから大丈夫だ」と感じて平然としているものは、誰もいなかった。皆が突如の事件に驚愕し、ショックでフリーズするものもいた。銃声、爆発音、車への銃弾、怪我人の血等、実物と非常に似たものでかつ安全性が非常に考慮されたものが使用されていた。また、ロールプレイ役のトレーナーらの演技は、迫真に近く、怪我人役の者らは、実際に大けがをしているとしか思えないような演技であったし、襲撃役の自警団の不気味さ等も参加者を圧倒するのに十分であった。(下記、写真参照)



⁶ The European Interagency Security Forum (EISF) and InterAction, “NGO Safety and Security Training Project How to Create Effective Security Training for NGOs, GUIDANCE TOOL E”, 2014, pp.147

このシミュレーションとロールプレイを非常に現実に近いものとして参加者が体験できたのは、下記の諸要素があったからである。

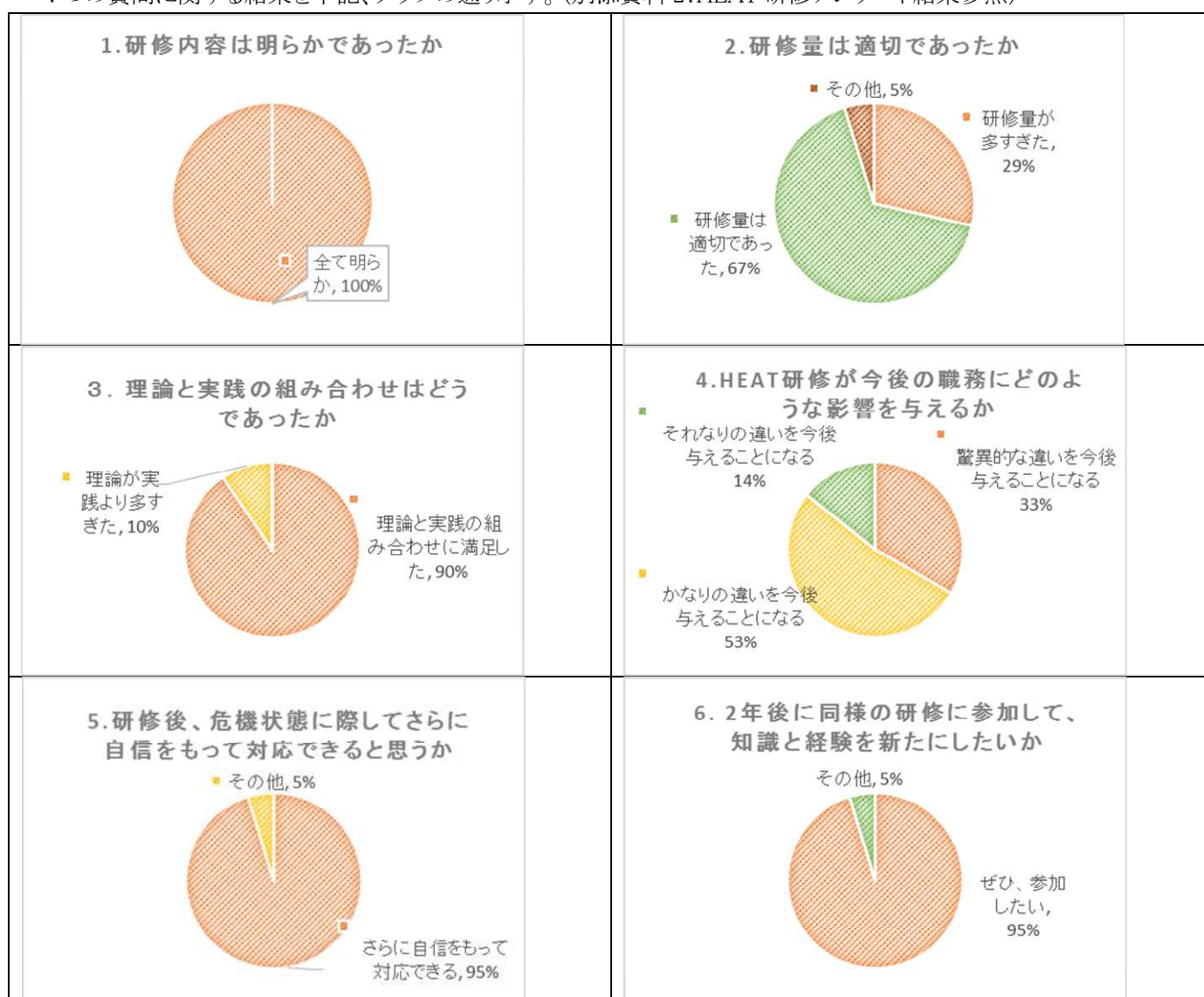
- ① 臨場感のある場所設定(過去に実際刑務所として使われた場所、倒壊した建物、地雷らしきものが残存する土地、火事に過去にあった建物、倉庫など)
- ② 優れたロールプレイ役のトレーナー(大けがをして叫んだり、激しく抵抗したりする怪我人、強盗役など、各場面設定でのロールプレイ役が訓練されており、非常な臨場感があった)。
- ③ 周到に準備された小道具(車のガラスに打ち込まれた銃弾、IED の爆発音、大量の血糊、銃など)

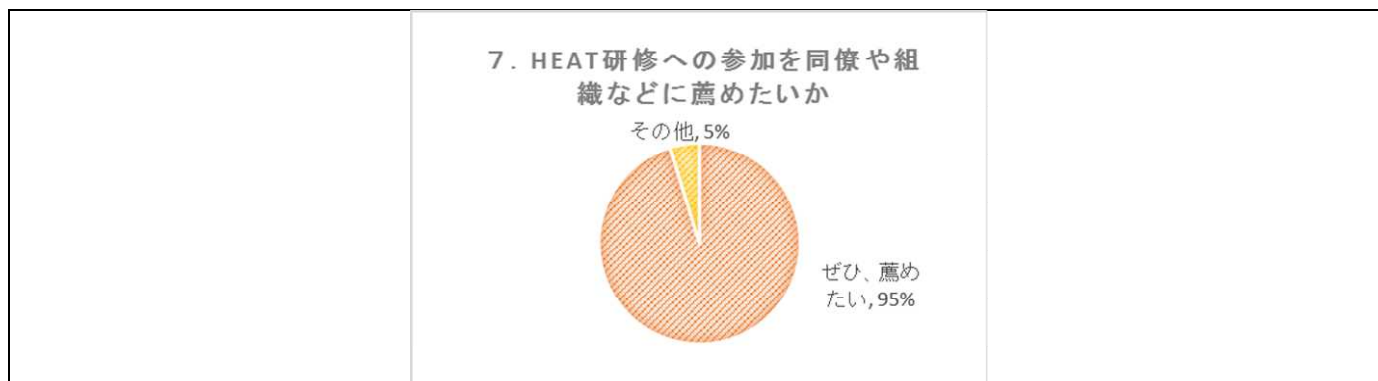
各シミュレーション後には、反省点と評価点がトレーナーから与えられた。身をもって体験した後のアドバイスは、脳裏に深く刻み込まれた。また、特筆すべき点として、これだけの臨場感を持った実践訓練が、過去 12 回開催されて、ほとんど事故を起こしていない(参加者の不注意によるマイナーな事故が2回あったという)ということである。それは、徹底した安全管理が終始行われていることと、実際に使用された小道具が安全性を非常に考慮したものであったことが挙げられる。

2-6 HEAT 研修の効果検証

上記研修の効果を検証するため、研修後に実施されたオンラインによるアンケート結果を以下に示す。オンラインアンケートは、研修の一週間後より実施され、参加者 23 名中、21 名が回答した。なお、参加者の構成であるが、DRC 職員、その他の国際 NGO 職員で構成され、シリア、リビアなどの紛争地で勤務しているものも多く、平均して 3～30 年以上の経験を有していた。

7つの質問に関する結果を下記、グラフの通り示す。(別添資料 2:HEAT 研修アンケート結果参照)





質問 4「HEAT 研修が今後の職務にどのような影響を与えるか」に対して、「驚異的な違いを今後与えることになる(7名、33%)」「かなりの違いを今後与えることになる(11 名、52%)」で、計 85%の参加者が同研修が職務にかなりの影響を与えると回答している。

さらに、質問 5「研修後、危機状態に際してさらに自信をもって対応できると思う」に対しては、「さらに自信をもって対応できる」と答えたものが 20 名、95%に上った。以上の結果は、HEAT 研修が参加者へ与えた効果の大きさを如実に示している。

3. 考察・提言

3-1 結論

HEAT 研修の参加前に、私が立てた仮説は、「各種条件(①十分な状況設定、②十分に考慮されたプログラム、③優れたトレーナー)を満たした場合には、シミュレーションやロールプレイを用いたハイブリット学習型の研修は、他の研修に比べて参加者に格段の効果をもたらすことが可能となる。」であった。参加および検証を通じて、本仮説は、下記のように明らかになったといえる。

「各種条件(①十分な状況設定、②十分に考慮されたプログラム、③優れたトレーナー、④臨場感のある場所、⑤優れたロールプレイ役の存在、⑥周到に準備された小道具、⑦経験値の高い参加者層)を満たした場合は、シミュレーションやロールプレイを用いたハイブリット学習型の研修は、他の研修に比べて参加者に格段の効果をもたらすことが可能となる。」

3-2 本研修成果の自団体、NGO セクターの組織強化や活動の発展への活用方針・方法

研修で学んだ内容を、当会レバノン事務所でワークショップ形式で共有し、国際・ローカルスタッフの危機管理意識をより一層啓蒙する。具体的には、下記の内容等を計画している。

- ・事業地の立体制作による危機管理のディスカッション: 右図写真のように、事業地の道路、建物などを立体的に共同作成することで、危機管理の方法をより具体的にイメージし考察するための手段とする。
- ・応急処置の一部実践: 毛布での運搬、包帯を使った応急処置
- ・脅威の軽減方法として、危機管理計画や標準作業手順書を作成
- ・危機発生時の情報の伝達方法

今回の HEAT 研修で学んだ内容、特に、人質・誘拐発生時における危機管理戦略、人質となった場合の基本行動および心理的打撃の緩和、危機的状況下における組織の形成およびストレス対処方法、武器・地雷・爆破物への注意喚起等については、幅広く、様々な紛争地で応用できるものである。同研修を通じて習得した知識を幅広く共有することで、日本の NGO における安全危機管理に対するより一層の啓蒙としたい。

3-3 テーマに関する日本の国際協力分野への提言

紛争地等で勤務する日本の NGO 職員の多くが、心理的な重圧に耐えることに慣れているが、実際には身体的・心理的安全確保の手段を十分に学ぶ機会を与えられないまま、経験値と責任感で業務を遂行しているケースが多いように思われる。HEAT 研修は、通常の研修に比べると、高額ではあるが、NGO 職員が、心理的不安を減らし、十分な自信を持って任務にあたるために欠かせない内容を学ぶことができる。同研修参加後、SSCL

の安全研修専属トレーナーより、私に対して、「研修前に比べて、レバノンを取り巻く安全環境は悪化しているにも関わらず、自信を持って業務にあたっている様子がみられる」との言葉を頂いた。今回の研修に参加したアジア人は私一人であったが、今後、これらの研修に多くの日本人 NGO 職員が参加することができるようになることを願ってやまない。

HEAT 研修の受講は費用・環境の面から難しい場合が多いと思われる。その代替案としては、HEAT 研修実施団体を招聘し、日本で同様の研修を実施することが考えられる。各 NGO の中堅職員が一緒に受講することで、NGO 全体としての安全危機管理能力を総じて高めることができる。

別の代替案としては、HEAT のうち、実施が容易で比較的取り入れやすい内容について、研修経験者を中心として実施する方法もある。たとえば、緊急手当講座、無線ラジオや GPS の使用方法、毛布を使った怪我人の搬送、安全危機管理計画の立て方等である。参加者が安全管理に対する共通の知識を事前に得ていることを前提とする。

その他身近な方法として、立体的なジオラマを作成して安全危機管理の手法をディスカッションする方法がある。ビニールシート上に活動場所付近の道路をテープで示し、検問所や学校、政治団体の建物などを、立体的に箱などを置いて示す。車両は、ミニカーなどで代用する。活動場所を取り巻く状況を俯瞰的に見ながら、「もし、この建物が爆破された場合は、どこに逃げるのがよいか。この道路が封鎖された場合は、どのような経路を使うのがより安全か」などとシミュレーションする。危機発生時に対する想定を具体的にを行うことできる(写真右)。

また、安全危機管理に関するオンラインコースを無料で実施している団体もあるので、それらを通じて学習後、ディスカッションなどを行うことも、組織の能力強化には役立つと思われる。
(例: the United Nations Department of Safety and Security (UNDSS) <https://training.dss.un.org>)。



NGO のセキュリティについての議論は、ジャパン・プラットフォームの NGO ユニットなどですでに開始されているが、ジャパン・プラットフォームや JANIC 等を通じて、NGO 全体での包括的な取り組みを共に実践していくことは可能ではないかと思う。特に、HEAT 研修に関しては、緊急支援を実施しているジャパン・プラットフォームを中心に、外務省の資金協力も得て国内での早急な実施が望まれる。

4. 団体としての今後の取り組み方針（団体の責任者をご記入ください、800文字程度）

当会ではこれまで中東の紛争地域での支援活動を行ってきたなかで、幸いなことに事件や事故に巻き込まれることが無かったが、ここ数年はいままでとはかなり違ったセキュリティリスクを感じるようになっていた。そのため HEAT 研修についても関心を持っていたが、機会を逸していたところ、今回非常に良いタイミングで海外スタディ・プログラムの支援で受講できたことに、研修受講者本人はもとより、団体としても非常に感謝をしている。

従来 NGO においては、往々にして信念や自己犠牲的な献身性、経験値だけが重要視され、社会政治状況の正確な分析、状況に対する客観的な判断、危機分析、冷静な対応などは軽視されがちであった。安全管理はその最たるもので、日本社会一般に、紛争地に対する抽象的な恐怖がある一方で、受講者が上述しているように身体的・心理的安全確保の手段を十分に学ぶ機会がないまま、個人的な経験値や勘に頼るケースが多いことを痛感している。

紛争地において人道支援組織が活動するにあたっては、軍隊や警察組織などとは異なる理論や方法が求められている。HEAT 研修の受講者が増えることで、NGO の安全管理の弱点を克服し、ガイドライン作りなども可能になることを期待している。

当会では他に数名が類似の研修経験を有しているが、研修未経験の駐在職員がまだいることから、研修受講者が、当会の職員や現地スタッフ、また関連のある他の団体にも研修で得た知見を広げることで、研修を広く裨益したいと考えている。またこうした安全研修の機会を他の職員に広げ、また現地職員についても安全研修の機会を与えて、業務の遂行に必要な安全管理能力向上を図っていきたいと考えている。

緊急支援活動を行っている NGO 職員に向けての HEAT 研修については、ジャパン・プラットフォームでも国内実施を検討していると聞いているが、外務省の助成などによって実施が可能になり、多くの関係者が参加する機会を得られるようになることを願ってやまない。 (事務局長 田中好子)

5. その他

5-1 本プログラムや事務局側に対する提案・要望等

HEAT 研修の初日には、首都ベイルートのブルジバラジネにて連続テロ爆弾事件が発生し、2日目には、パリにて同様にテロ爆発事件が発生したため、非常事態に対応するための研修の重要性を、殊更に強く感じた。今回の研修は、同プログラムのご支援がなければ不可能であったことであり、参加する機会を与えて頂いたことに深く感謝する次第である。

5-2 写真類及び研修員が受入先機関に提出した報告書類等があれば、添付

なし

以上